



No.2 2020.12.10

岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所

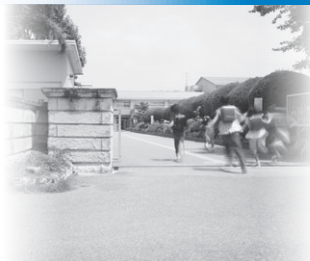
〒020-0022

岩手県盛岡市大通一丁目1-16

岩手教育会館4F 岩手県教互センター内

TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535

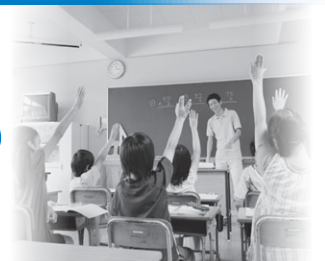
E-mail:j.sato8252@gmail.com



リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～



「都市の理屈」を超えた学校づくりを



遠藤 泉

(前岩手日報論説委員)

略歴

1981年岩手日報社入社

編集各部、支社局を経て2004年から論説委員

2020年9月末退職

2009年から盛岡大学非常勤講師

記者歴約40年のうち、支社局時代の関わりを除き教育専従としては通算2年。それでも随分勉強させてもらったという印象がある。2000年前後に担当した時期は霞ヶ関から「ゆとり」の大波が押し寄せる一方、本県でも少子化が目に見えて、岩手県教委は高校新整備計画を策定して再編に乗り出すなど、教育の在り方に関わって世紀をまたいで大きな転換点だったと思う。

時代は下り、小泉政権の後を引き継いだ第1次安倍政権、さらに民主党から政権を奪い返した第2次安倍政権以降の教育は、より根源的な意味でさらに重要な転機に直面したと言えるだろう。首相主導で教育の大切さを再確認するのはよしとして、「美しい国」を掲げた改革の方向性には首相個人、あるいは自民党が本来的に含有する思想がにじみ出た。

個より公を重んじる流れの中で教育基本法を改正し、「ゆとり教育」を否定。「ゆとりっ子」のわが子らは、世代に冷たい社会の風にさらされながら大人になった。

学問的な素養をはじめ運動、芸術、企画力や文章力など、子らが個々に有する才能を伸びる方向に伸ばせるなら、個人的には「ゆとり」は良策と思う口だが、議会制民主主義の建前として国民の支持で成り立つ政権と思えば、そのすることにある程度納得せざるを得ない面はある。問題は、教育改革という大号令の下で学校が随分と忙しくなり、先生と子どもの距離が遠くなる傾向が増幅していると思われることだ。

国際調査で日本の子どもらの学力低下が懸念されると、即座に「脱ゆとり」へかじを切ったのは典型的だろう。ゆとり教育の検証も満足に行われないうちに教科書は厚くなり、教師は考える「ゆとり」もなく新たな教育方針に突き動かされる。深刻ないじめや不登校の事例が社会問題になった場合も同様。なぜそれが起きたのか。もしかしたら特殊な事情があったかもしれないが、そうした点はさておいて、都市と農漁村を問わず全国で、学校ごとに調査が督促され、防止対策が出されれば対応を形で示さなければならない。

庶民の生活は多様化して、両親に子ども2人と
いった昭和の頃の標準的な家庭像は成り立たない。
多種多様な背景を背負った子どもたちが机を
並べる時代。ただでさえ教育課題は増える一方な
のに、折々の政治のアンテナに引っ掛かった事案
への対処に追われて教師らはなかなか能動的にな
り切れないのが教育現場の内実ではないだろう
か。

当の先生たちはもちろん、教育行政も、政治家
だってそれなりに（失礼ながら）、真剣に教育に
向き合っているに違いない。だが、それぞれの取
り組みが有機的に絡み合っているようにみえない
ところが問題だと思う。政治はとかく強権的で、
聞く耳を持たないといった批判がつきまとうが、
ある意味で先生も、多忙の故に「聞く耳を持た
ない」傾向がある気がする。

学校に関わる不穏な事案を聞きつけて取材に出
向き、拒否に遭ったのは一度や二度ではない。そ
の理由は単なる保身とも言えまい。問題が公にな
れば対応に追われる。つまり忙しくなる。問題を
極力内輪に留め置けば、余力を他の案件に振り向
けられる。想像だが、考えられないことではない。

これは後日談として聞いた古い話。県内の小集
落にポツンと建つ一軒家から火が出た。そこに住
む中学生の男の子の放火だったが、警察は当時の
署長判断で一切をひた隠し、放火どころか出火の
事実すら報じられなかったという。「家人も納得
していた」。詳細は伏せるが、元署長は退職から
相当の年数を経て、その事実をポロリと漏らした。

元署長は中学生の置かれた状況に鑑み、その将
来をおもんばかったとも言い、以後、陰に陽に中
学生の成長を見守り続けたという。

記者とすれば、元署長の判断も含め記事化の誘
惑に駆られる出来事だが、何が子どものためかと
問われれば答えに迷う。学校や教育行政は、どう
反応すべきだったのだろう。

コロナ禍でリモートが奨励されるなど、教育は
またもや大きな転機にある。さまざまに子ども
たちの育成に関わる人たちが、ともすれば子ども
たちを遠巻きにする状況が強まらないか気にかか
る。全人教育という伝統的な理念に評価は一様で

はあるまいが、折に触れ先生の「全人」に感化さ
れて育った身としては、これからの時代こそ「小
規模」の先進性に目覚めるべきではないかと思う。

コロナ禍は、生活基盤としての学校の存在感を
際立たせた。東日本大震災からの復興過程で、学
校という存在が地域を明るく照らした経験は忘れ
難い。

全ての学校に立派な体育館やプールを備えるこ
とができなくてもいい。その前提で、子どもたち
はもちろん、地域住民の寄り添って来た学校を、
なるべく多くの地域に残せないだろうか。不便が
あれば、行政や地域の出番だ。学校を維持する
前提で、大人がそれぞれの立場で懸命に努力す
る姿を子どもたちが身近にすることは、教育が
教育であり続けるための土台と思えて仕方ない。
ひいては、こうした取り組みが地域そのものの持
続性を高めることにもなるだろう。

ここ数年、教育が効率とか生産性ととも語ら
れる場面を目にし耳にする。わけても義務教育は、
そうした尺度とは別のところで存在感を発揮して
きたはずだ。高度成長期から一貫して都市の理屈
に追い立てられてきた地方にあって、人と人の関
係性が「密」な学校の風景に、郷愁を超えた意義
を感じている。



「一人ひとりを大切に」を実現するために 学校教育で大切にされるべきこと



畠山 将樹

(弁護士)

● 1 はじめに ●

例えば「一人ひとりを大切に」という言葉などは、学校でもよく使われる言葉ではないでしょうか。おそらく、このことが大事ではないと言う人はいないでしょう。

しかし、現実におきている様々な問題や事件について報道を通じて見ていくだけでもそうですが、保護者として、また、弁護士として、いじめにあった子、いじめてしまった子、刑事事件を起こしてしまった子、色々なトラブルや悩みを抱えている子などに接する中で、本当に一人ひとりが大切にされているだろうか、尊重されているだろうか、誰一人として見捨てられることがなかったであろうか、と思わざるを得ない場面があります。

「一人ひとりを大切に」とはどうすることなのでしょうか。

● 2 個人の尊重 ●

「すべての人間を個人として尊厳な価値を持つものとして取り扱おうとする心、それが民主主義の根本精神である」、「民主主義の根本は、精神的な態度にほかならない…それでは民主主義の根本精神はなんだろうか、それは、つまり、人間の尊重ということにほかならない。」

これは、1948～1953年まで中学・高校の社会科教科書として使われていた「民主主義」という文部省著作教科書の中の一節です。

この教科書に繰り返し出てくる「人間の尊重」、

略歴

- ・2011年岩手弁護士会登録
- ・2015年南部富士法律事務所共同開設
- ・2016年から岩手県教育委員会委員
- ・2017年から日本弁護士連合会法教育委員会委員
- ・2020年から人権擁護委員

日本国憲法が最も大事にしている「個人の尊重」、このことを実現することが、次世代を担う子を育む学校教育において、最も大切にされなければならないことのひとつだと思っています。

「一人ひとりを大切に」というためには、この「個人の尊重」が徹底されなければならないと思うのです。

● 3 競争とルールはなるべく少なく ●

しかしながら、日本人は自尊感情が低いとよく言われ、各種調査でも結果としてそうになっています。これは「個人の尊重」が徹底できていないことの表れではないでしょうか。

社会学者で東京大学教授の本田由紀氏は、この日本人の自尊感情の低さについて、「学校における相対的な序列の中で、自分はどの程度の間かということ繰り返し繰り返し言われ続けることが原因だ。学校からの要求は絶対という教育を受けていると、自分では何も考えられない子どもが増えてしまう。そしてお仕着せのルールになじめないと排除される。そうした自分を否定された経験やがんじがらめになった経験が原因だ。」等と分析されています。

この点に関連して、2019年3月、国連子どもの権利委員会が日本政府に対し、「社会の競争的な性格により子ども時代と発達が障害されることなく、子どもがその子ども時代を享受することを確保する」ことなどを勧告していることは、一つ知っておきたいことです。市民社会における競争主義から子ども期を守るためのバリアを構築すること

が政府の義務なのだとの認識がこれほど包括的かつ明確に示されたのは初めてである、と新潟大学准教授の世取山洋介氏は分析されています。

誰も自分の育った教育環境が当たり前だと思うものから、多くの日本人は気づけないことかも知れませんが、日本人は過度に競争させられている、他と比べて勝つことを目標にさせられている、決まったルールに従わされる、そこで負ける経験、ルールに馴染めずはみ出してしまう経験、そんな否定経験が多くなっているのです。

そのルールに関してですが、目的がよくわからなくなっている或いは手段として相当ではなくなっているというルールはありませんか。

一旦できたルールは無くなり難い、また、どこかで効果があったというルールが熟慮を経ずに導入されてしまう、という実態があると聞きます。そんなルールを学校が一生懸命守らせようとしていないでしょうか。何かの目的を達成するための手段であるはずのルールなのに、ルールを守らせることが目的になっていないでしょうか。子ども達のために良いことだと思って設けられたルールですから、どんなルールも何らかの意義はあるでしょう。しかし、そのルールによって問題が起きる、弊害が生じることもよく考えなければなりません。勿論そこには、家庭や地域が、躰のような部分も含めて学校に過度に頼りすぎてきた実態があるでしょうから、我々保護者が、地域住民が、考え方を変えていかなければならないことで、学校だけでの問題ではありません。

ここで言いたいのは、そんなルールになじめない子、ルールからはみ出してしまう子を問題視していないか、ということです。その子達は、だらしない子ですか、ダメな子ですか。馴染めない、守れない、そこには個々の理由があるはずです。ルールを作ってしまったその結果ダメな子、できない子というレッテルを貼られる子を生み出すことになっていないでしょうか。

また、相対的な比較では、どんなに頑張っても悔しい思いしかできないことがあります。その悔しさで延びる子もいるでしょうが、みんながそうではありません。悔しい思い、辛い思いが、自己を肯定する気持ちを減退させていくこともあります。

他者と比べて競い合うことはなるべく少なくし、また、ルールもある目的達成に必要な手段であるか見つめ直して最小限にしていくことは、一人ひとりが尊重されることの大事な一歩だと考えます。

4 働き方改革

学校で「一人ひとりを大切に」する、すなわち「個人の尊重」のために、上記3のほかに、どんなことが考えられるでしょうか。

恐らくこれから進むICT活用は、個々の能力を活かすものとして、その一助になることは間違いありません。このICTについても期待を込めて述べたいことはありますが、ここでは、「働き方改革」に絞って述べます。

多くの保護者は、教職員の方々に、ゆとりをもって子に接して欲しいと願っていると私は思っています。

教職員の方々が、精神的にも、現実の時間的にも、ゆとりをもって一人ひとりに接することが、子ども達一人ひとりを個人として尊重することの原点ではないでしょうか。子ども達が表面に出す感情は、真の感情とは異なることがあります。なんでそんな言動をするのか、その背景には何があるのか、ゆとりをもって接して初めて気付くことは多いはずです。そのことを実現するための「働き方改革」、これは確実に実現していかなければならないものです。

やはり、学校現場はとても忙しいと思います。子ども達を思う熱い気持ちで、様々な点で懸命に取り組んで下さっている教職員の方々には本当に感謝しております。多くの方がその熱い思いで忙しさを気にせず働いてくださっていると思います。しかしながら、この忙しい状況を何とかしなければ、教職員の心身の健康が保たれません。巡り巡って子ども達のためにならないという現実を生みます。

また、多忙な状況或いは多忙感、統率ニーズを増大させ、学校現場に様々なルールを作っていくことにもなります。前述のとおり、管理統制のための手段が目的となったようなルールは個人の

尊重とは逆方向に振れることになります。

子ども達一人ひとりの尊重を実現させるために、是非とも「働き方改革」を推し進めていかなければならないと考えます。

● 5 個性を伸ばせ、とは少し違う ●

個人の尊重という、そうだ一人ひとりの個性を伸ばそう、と思うかも知れませんが、私はそれとこれとは異なるものと考えています。

2003 年に出版された養老孟司氏の「バカの壁」を読まれた方は多いかもしれませんが、その第三章は「『個性を伸ばせ』という欺瞞」と題して、今の若い人は「がんじがらめの『共通理解』を求められつつも、意味不明の『個性』を求められるという矛盾した境遇にある」ことが可哀想だとして、「若い人への教育現場において、おまえの個性を伸ばせなんて馬鹿なことと言わない方がいい。それよりも親の気持ちが分かるか、友達の気持ちが分かるか、ホームレスの気持ちが分かるかというふうに話を持って行くほうが、よほどまともな教育じゃないか」と綴られています。「個人の尊重」を考えるにあたり、個性について、学校教育においてどう考えるべきか、考えさせられる内容です。

●● 6 最後に ●●

前出の教科書「民主主義」からまた引用します。「繰り返して言うと、民主主義は決して単なる政治上の制度ではなくて、あらゆる人間生活の中にしみこんで行かなければならないところの、一つの精神なのである。それは人間を尊重する精神であり、自己と同様に他人の自由を重んずる気持ちであり、好意と友愛と責任感とをもって万事を貫く態度である。この精神が人の心に広くしみわたっているところ、そこに民主主義がある。社会も民主化され、教育も民主化され、経済も民主化される。」とあります。

「個人の尊重」を、学校教育の場面で考えるならば、過度の相対的競争や押しつけのルールに

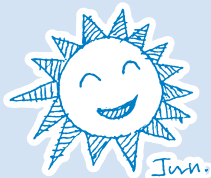
よって否定された経験を積み重ねさせず、簡単に個性を伸ばせなどとは言わず、教職員がゆとりをもった環境下で、自己と同様に他人を尊重する精神を養うことを大切にしなければならないのではないのでしょうか。

学校と家庭・地域の適切な役割分担を前提としながら、こうしたことが私が思う「一人ひとりを大切に」ということの実現の道であり、学校教育で大切にされなければならないことだと考えます。

参 考 文 献

- ・文部省著「民主主義」(1995 径書房 復刊)
- ・文部省著, 西田亮介編「民主主義 エッセンス復刻版」(2016 幻冬舎新書)
- ・養老孟司「バカの壁」(2003 新潮社)
- ・本田由紀「社会を結び直す」(2014 岩波ブックレット)
- ・CRC 日本監修「子どもの権利条約ハンドブック」(2016 自由国民社)
- ・妹尾昌俊「『学校が忙しすぎる』を諦めない」(2017 教育開発研究所)
- ・工藤雄一「学校の『当たり前』をやめた。」(2018 時事通信社)
- ・荻上チキ, 内田良「ブラック校則 理不尽な苦しみの現実」(2018 東洋館出版社)
- ・「人権のひろば」No.135
- ・「日本教育法学会ニュース」第 139 号





教室の窓から



校内暴力の嵐の中で

1981年3月に大学を卒業はしたものの、採用試験に落ちて、アルバイトをしながら試験勉強しようと思っていた矢先に常勤講師の話があり、沿岸のS中学校に勤めることになった。当時のS中学校は、学年3クラスの規模で、20人ほどの教職員のうち私を含めて3人が臨時講師だった。

当時の校舎は、山田線S駅奥の山際にあった。しかし、のんびりとした学校の周辺環境とは全く違い、校内暴力を始めとした「問題行動」の状況は想像を絶する凄まじさで、校舎破壊、授業の抜け出し、恐喝、窃盗、万引き、喫煙、飲酒、シンナー、暴力、そして対教師暴力などの「事件」の対応に追われる毎日だった。教育実習以外の学校現場経験がまったくなかった私は、どうしたらよいかわからず、なんとか生徒たちに授業に前向きに参加してもらえ工夫がないかと悪戦苦闘していた。しかしそんなに上手くいくはずもなく、授業が成り立たない状況に途方に暮れる日々を過ごしていた。

今であれば、メンタルを害してもおかしくない状況だったと思うのだが、たいして精神的にタフではない私がそうならなかったのはなぜだったのだろうか。当時は、「問題行動」の状況分析や対策など、頻繁に認識を共有し、組織的な対応となるよう努めていた。そのことによって、大変な状況ではあっても、職員一人ひとりが孤立することから守られたのではないかと思う。

またS中には、県北経験のため単身赴任の下宿生活をしていた50歳代の先生が何人かいて、どうしたら生徒たちが落ち着き、正義感を取り戻し、前向きなエネルギーを勉強や学校行事に集中してくれるようになるのか・・・など、何度も何度も話し合ったものだった。このことにも、私は強く励まされた。

当時の中学校は、S中学校だけが荒れていたのではなかった。では、なぜ、全国の中学校が「荒れた状態」になってしまったのか。その少し前に、「受験競争の激化」の中で、学習指導要領の改訂によって授業時間数が大幅に増えるということがあった。これによって、「勉強の苦手な生徒たち」が「学校の中に自分たちの居場所を見いだせなくなった」のではないか。だから、彼らは「外」ではなく「学校の中」で荒れたのだと思う。

今思えば、生徒たち一人ひとりの成長を保障することや、学校の活動全体を通して自尊感情や自己有用感を高めることが大事にされていなかった状況への彼らの意思表示・表現としての抵抗ではなかったか。ある先輩の先生は、「彼らの行動を表面だけで見るな」と教えてくれた。

教員としての経験も技術もない私は、自分の無力さを痛感し、大学を卒業する頃に抱いていた夢や理想は、1年過ぎる頃には粉々に打ち砕かれていた。そして、「教員として仕事を続けるのは無理だ。どうせ講師だからもう教員をめざすことはやめよう。」とも思うようになっていた。

そんな考えを改めさせてくれた言葉が二つあった。ある先生が教えてくれた「教育に臨時はない」という言葉と、ある生徒が自分の担当する学級新聞最終号で私に向けて書いてくれた「先生にはたくさん迷惑をかけたかもしれないけれど、こんなことぐらいで教員をめざすことを諦めないでください。」という言葉だった。

私は、自分が恥ずかしくなった。「講師だから」などと甘えていたが、生徒たちにとっては、正規も臨時もないのだ。一教員として全力で生徒たちと向き合うこと、現状の困難から逃げずに真摯にそれを乗り越える努力を続けること、その大事さに気づかされた。そして、「こんなことぐらいで教員になることをやめないで」と思ってくれる生徒が、一人でもいたことに、「学校の仕事も捨てたもんじゃない」と勇気をもらったのだった。(J)